

**6 月を振り返って**

例年 6 月の教職課程センターは、集団討論演習に力を入れてきました。集団討論は、東京都をはじめいくつかの自治体では採用選考から除外されていますが、埼玉県・千葉県・千葉市など、まだまだ重要視している自治体もあります。しっかりと準備・対策をしておくことが大切です。相手を否定しない、相手の長所を認めながら、自分の色も加えて、課題解決のために、参加者全員で力を合わせてゴールを目指すことが、何より大切です。今年度は埼玉県や千葉県の受験生がいなかったため、講座を開設できませんでしたが、来年度これらの自治体の受験を考えている人は、早めに準備をしていきましょう。

**7 月の予定**

7 日にはいよいよ採用選考の一次選考が予定されています。直前の今は、一次選考の準備に集中してください。以前に比べて一次選考のハードルは下がっているとはいえ、手を抜いてはだめです。特に専門教養は、教員としての専門性に直結する内容なので、しっかりと身に着けておきましょう。自治体ごとの出題傾向もあるようなので、過去問を繰り返し解いて、得意な領域を広げておきましょう。ここからさらに本番の選考に向けて、ギアを一段上げていきましょう。

**採用選考直前の取り組み**

今月は 8 日から 31 日まで、個人面接の最終演習を実施します。ここでは、各自の願いや思いを「ストーリー」に仕上げて面接官にアピールできるようになるために、本番の形式と同じ形で演習を行います。詳細については個別にお話いたしますが、個人面接において一番面接官の心に刺さる内容は、あなたが「逆境を克服して成果を上げた」というストーリーです。困難な状況に追い込まれても、へこたれることなく這い上がってきたというストーリーには人を感動させる力があります。あなただけにしか語れない「ヒーローズジャーニー」を作り上げましょう。（こちらでも個別に作戦を立てていきますね）

もう一つ大切なのは、「好感度」です。面接での合否はこの「好感度」で決まるといってもいいでしょう。面接官は短い面接での問答を通して、受験者の「魅力」や「可能性」を見出そうとしています。言い換えれば、面接官が合格させたい！と感じるのは、「この人となら一緒に職場で働いてみたい！」あるいは「この人なら子どもたちの前に立ってもらいたい！」という印象を持った時です。面接官にそんな印象を残すために、皆さんが面接に臨む場面で求められているのは、決して知識を述べることではありません。また教科書に書いてあるような正解を述べることでもありません。面接は試験ではありません。「選考」です。大切なのはあなたにしか語れない夢や希望、理想の学校像を語ることです。面接官とこんなキャッチボールができると良いですね。

面接官：「今、学校には A という課題があります。あなたはこの課題にどう取り組んでいくつもりですか？」

受験者：「はい、私が教員になったら、B という方策を実行することで、この課題を解決していきます」

面接官：「なぜ B に取り組もうと思うのですか」

受験者：「はい、B を行うことで子どもたちが C という力を身に着けることができると考えているからです」

面接官：「C が身につくとどのように変わるのですか」

受験者：「はい C が身につくことで、学校全体が D という状態になることが期待できます。これが私が考える理想の学校像です。」 ※（A～D にいろいろ当てはめながら考えてみましょう！）

## 知っておきたい！【非認知能力】の大切さ ①

昭和の時代から、教育の世界では「不易と流行はどちらも大切」と言われてきました。「不易流行（ふえきりゅうこう）」とは、いつまでも変わらないものの中に、新しい変化を取り入れることを指す言葉です。また、新しさを求めて変化をすること自体が、世の常であるということも指しています。

松尾芭蕉は「奥の細道」の中で、「変わらないものを理解しないで基礎は成立しないが、変わるものを理解しないときには進展がない」と述べました。この言葉からも、「不易」と「流行」はどちらか一方を重視するものではないことがわかります。即ち、「不易 → 時代が変化しても変わることがない大切な価値観」、流行 → 「時代とともに新しく生まれてくる考え方」、のどちらも大切である。と考えることができるでしょう。

不易の代表は、例えば「あいさつをする」「時間を守る」「次に使う人のことを考える」などの「心がけ」レベルから「豊かな人間性」「正義感」「公正さ」「自立心」「協調性」「思いやり」「人権尊重」「自然を愛する心」等の高い人格を形成する価値観まで、かなり幅広い考え方であるともいえます。

日本では、諸外国に比べて治安が良く、凶悪犯罪が少ないなど、国民が安心安全な生活が送れるのは、この「不易」の部分について幼いころから家庭のしつけや義務教育の中で教わってきた、という影響があることは間違いないでしょう。

さて本題の、非認知能力（Non Cognitive Skills）とは、2000年にノーベル経済学賞を受賞したアメリカの経済学者、ジェームズ・ヘックマン氏が提唱した概念です。学力やIQなどの数値で測れる能力（認知能力）に対し、意欲やコミュニケーション力といった数値では測れない能力を「非認知能力」と定義しました。

ヘックマンの研究は「ペリー就学前プロジェクト」と呼ばれています。研究対象は、低所得世帯であるアフリカ系アメリカ人家庭の、就学前（3～4歳）の子どもたちです。この研究では子どもたちを2つのグループに分け、片方のグループには毎日午前中に2時間半の授業を受けさせ、さらに週1回、午後に教師が家庭訪問し親への指導にあたり、自発性、社会性を重視した教育を行いました。その後教育を受けた子どもと受けなかった子どもの約40年間を追跡調査しました。その結果プロジェクトに参加した子どもの方が、高校の卒業率や持ち家率、収入等がいずれも高く、生活保護受給率や犯罪率が低い、という結果になりました。さらに40歳を過ぎてからの収入も高く、犯罪歴が低かったこともわかっています。

両グループの明暗を分けたのが「非認知能力」が身についていたかどうかです。社会で成功するためには、認知能力と非認知能力の両方が必要です。いくら学力が高くても、自分をコントロールできなかったり、他者とうまくコミュニケーションが取れなかったり、誠実さがなかったりすると、社会に出てもうまくいくはずがありません。近年、日本では小学校受験、中学校受験が過熱しています。一部の保護者はいわゆる「いい学校」に子どもを進学させれば将来「いい大学」に進学して、子どもが大企業などの安定した職に就けると考えて、幼少期から進学塾に子ども達を通わせています。しかしそこで子ども達が強制的に鍛えられるのは、入試で点数を取るための力＝認知能力です。実は極端に認知能力だけが鍛えられ、非認知能力が身につかないまま、バランスの悪い状態で成長している子どもたちがたくさんいるのです。



しかし前述したように、日本の教育の優れた点は「不易」の価値観を重視してきたことにあると考えられます。私たちは、もう一度この優れた国民性を支えている「不易」の価値観をしっかりと理解し、子ども達の非認知能力の育成に取り組んでいく必要があると考えているのです。（詳細は次号に掲載します）

保護者会は、保護者と教員との連携の基本となる機会です。この機会に保護者との信頼関係を築いていければ、学級経営も安定していきます。保護者会では、まず、和やかな雰囲気づくりを心がけます。その上で、学校としての教育方針や担任の教育方針などをわかりやすく話します。その際、子どもたちの具体的なエピソードを話したり、保護者から引き出したりするなど「来て良かった！」という保護者にとって「収穫」になるようにすることも大切です。「一年間お互いに協力し合って子どもたちを育てていきましょう！」との思いを共有できることが大切です。人生の先輩である保護者と話すのに、抵抗感があるかも知れませんが、謙虚な気持ちで、誠実な態度と言動で保護者と接していくことで、徐々に信頼が得られるものです。保護者を責めたり攻撃したりすることは、厳禁です。まず良好な信頼関係を築くことに力を注いでいきましょう。

### ◇ 保護者会を開く際の留意点

- 机の配置は、コの字型、または円形にして、全員がお互いの顔が見えるように配置します。
- 黑板には、保護者への感謝の言葉、今日の議題、大まかな流れ、を書いておきます。  
「今日はお忙しい中お越しいただきありがとうございます。本日の議題①②③（箇条書き）終了予定時刻（〇時〇分）」
- 机上には子どもの名前を書いた名札を用意しておきます。
- 学校や学年からの重要な連絡事項は、口頭ではなく、印刷物として準備します。
- 説明は、資料に書いていない点を補足説明しながら話すと、短い時間で保護者の理解が深まります。
- 子どもを育てていく上での役割と責任について、学校で取り組んでいることと、保護者にも協力してほしいことに分けて説明します。
- すべての保護者は大なり小なり子育てに悩みを抱えています。家庭には個々の事情や見解があることを理解し、**常に謙虚な態度で保護者の話を聞きます。**
- 子どもたちの問題については、家庭の協力を仰ぐだけでなく、**担任として取り組んでいく解決策を示します。**学校と家庭で同じ方向で指導していきましょう！という合意形成を目指すことが大切です。
- 保護者は学校での子どもの様子を知りたいと思っています。子どもが努力している様子について、エピソードを交えて具体的に話をします。生徒の具体的な活動を知ることによって保護者は安心感を得ることができます。
- 子どもたちを温かく見守りつつ、しかし指導すべき点は毅然とした姿勢で接している様子が分かるように話をします。特に気を付けている点があれば、丁寧に指導している様子を伝えることで、保護者は安心感を得ることができます。
- 始めと終わりの時刻を守ります。
- 都合により保護者会に出席できなかった方にも、配布資料を子どもに持たせるなど、フォローも忘れないようにします。
- 個々の子どもの学力や生活態度、家庭の状況などについては、**守秘義務を守り、絶対に他に漏らしてはいけません。**





## 学校と家庭の連携について

改めて言うまでもなく、学校の役割は子どもたちの健全育成です。健全育成を実現させるための活動には、大きな2つの柱があります。1つの柱が「学習」もう1つの柱が「体験」です。「学習」は教科の指導＝授業を通して子ども達の「考える力」を育てる取り組みです。学校の生命線と言えるでしょう。前述した認知能力は、主に授業を通して獲得させる能力です。次に「体験」は子どもたち同士が集団で活動する中で、様々な非認知能力を獲得することを目的としています。主に学級活動、生徒会活動、学校行事等の場面（この3つを併せて特別活動と言う）で獲得させていきます。しかし、これらの活動は学校だけで完結するものではありません。当たり前ですが、子ども達は学校で過ごす時間より家庭で過ごす時間の方が長いからです。そのため学校で取り組んでいる教育活動については「何を」「どのように」取り組んでいるのか保護者にも理解してもらい、協力を求めていく必要があります。学校（担任）から保護者への連絡の手段は、① 保護者会 ② 学級だより ③ 電話連絡 ④ メール配信などが考えられます。これらはそれぞれ機能が違うので、その特性を理解した上で使い分ける必要があります。

- ① 保護者会：年度初め、学期末、学年末に設定されることが多いです。年度初めは、担任との顔合わせ（相互理解）学期末は今学期の成果と課題の報告、学年末は一年間の成長の確認と次年度へ向けて等、学校（担任）からのメッセージを発信するために行います。
- ② 学級だより：子どもたちの日常の活動の様子を、保護者に伝えるために発行します。行事への取り組みや、今学級で力を入れていること、担任としての願いや思いを掲載します。年度初めに保護者の了解を取っておけば、写真を載せることもOKです。学級全体の雰囲気伝えるために有効な手段です。
- ③ 電話連絡：緊急性がある場合は、電話連絡が必須です。学校での事故やけががあったとき、欠席連絡が無いのに登校していないとき、等は管理職に報告するとともに、時間を空けずに電話連絡します。子ども同士のトラブルや問題行動があった時も、「今日学校でこんなことがありましたので、学校としてこのような指導をして帰宅させました。ご家庭でも親子でよく話し合ってください」と学校での指導の経過を報告します。心がけてほしいことは、問題行動があった時だけ電話連絡をすると（しなければならぬのですが）保護者は学校からの電話を「恐れる」様になります。可能であれば、何か良い行いがあった時に、そのことを電話で保護者に伝えるようにすると、保護者は安心します。例えば（今日帰りに急に雨が降ってきたのですが、〇〇さんは、傘が無くて困っているお友達に「一緒に帰ろう！」と声をかけて傘に入れてあげていました。優しい気持ちが育っていてうれしく感じました）の様に保護者に連絡することで、保護者は子どもの成長を実感することができるのです。
- ④ メール配信：最近では校務支援システムが導入されていて、全家庭に一斉配信メールを送信することができる学校も多いです。急な時間割の変更、登校時間の繰り下げ、等子どもたちが下校後に、担任から全家庭に周知したいことなどはメール配信が適しています。



子ども達の健全育成には、学校での取り組みに関する保護者の理解と協力が不可欠です。子どもとの信頼関係もちろん大切ですが、子どもの後ろにいる保護者との信頼関係も大変重要です。保護者の信頼を勝ち取るためにも、しっかりと意識して家庭とのコミュニケーションを取るようにしましょう。